

## 戦艦大和（最後の）艦長 有賀幸作海軍中将

（転載元）

諏訪海軍史刊行会編「海こそなけれ 一諏訪海軍の航跡一」（非売品）  
平成6年11月3日発行 同会事務局発行（大田吉郎代表）の  
140－147ページ

19.7.10 海軍水雷学校教頭

19.11.25 戦艦大和艦長

20.4.7 戦死、任海軍中将（二階級特進）

従四位功二級勳一等

個人感状、団体感状授与さる

戦艦大和は同型艦武蔵とともに日本海軍が世界最大最強の不沈戦艦として昭和十二年呉海軍工廠で着工、真珠湾奇襲攻撃直後の昭和十六年十二月、極秘に竣工させた基準排水量六四、〇〇〇トン、速力二七ノット、水線長二五六メートル、最大幅三七メートル、四六センチ主砲三基、九門を装備した巨艦であり、当時この大和の艦長となることは日本海軍最高位の艦長となることであった。

昭和十九年（一九四四）十一月二十五日、戦艦大和艦長の辞令が有賀幸作大佐に通達された。

当時有賀は去る五月、重巡鳥海の艦長としてボルネオ北東のタウイタウイ泊地に在泊中、熱帯病のデング熱が悪化し、六月六日付、横須賀鎮守府附となり、内地に帰還して七月十日、海軍水雷学校教頭兼研究部長に任命されていた。

この頃の戦局はますます類勢となり、六月十九、二十日、司令長官小沢治三郎中将率いる第一機動艦隊がマリアナ諸島西方海面で、米大機動部隊と決戦し、兵力・兵器・戦法・戦枝など格段に勝る米軍に完敗し、十月下旬のフィリ。ピン沖海戦では圧倒的な実力差により、我が連合艦隊はまたも大敗し、多くの海上兵力、航空兵力を失っていた。

こうした情勢の中で、有賀は第四駆逐隊司令今時の活躍と、鳥海艦長でみせた抜群の力量を見込まれて、日本海軍最期の頼みとする戦艦大和の艦長に選ばれたのである。

戦艦大和艦長の発令を受けた有賀は、本懐これに勝るものなしと感銘し、大和を死に場所と定めたという。

現在、有賀の長男正幸（四十三回生）の許に、漫画家の故長崎拔天が描いた「戦果図 抜天」とサインの入った水彩画がある。二人の子供が大きな鯛を釣

って、喜んで松林のある砂浜を走ってくる絵である。従軍画家の長崎抜天氏が大和を訪問したとき、艦長室で描いて有賀艦長に贈ったものだが、有賀はこの絵に筆で「神風大和 幸作」と書いて、母親や妻子の住む長野県上伊那郡朝日村（現辰野町）の実家に送り届けた。

いうまでもなく「神風大和 幸作」の文字には、危急存亡の日本を救いたいT心の願いを込めた有賀の確固とした決意が秘められている。

昭和十九年十二月中頃、浜名海兵団で教育訓練を受けていた海軍技術科見習尉官の長男正幸のところに父から一通の封書が届いた。封書の裏を見ると「大和艦長 有賀幸作」とだけ書かれてあった。これを見て飛び上がらんばかりに驚いた。大和は多くの海軍々人にとって、噂に聞くだけの「幻の大戦艦」であり、日本海軍の象徴であった。その大和の艦長に親父がなったのだ。また当時書いてはならない艦名が明記されていたので、二重に驚いたのである。戦時中海軍は機密保持の立場から手紙などに艦名を書くことを禁止され、符号でかくように規制されていた。大和の符号は「ウ五五六」でその後の父からの便りは、すべて「呉局気付 ウ五五六」となっていた。

開封して見ると、便箋二枚に勢いのいい大きな字でみじかく、大和艦長就任の所感が書かれてあった。とりわけ。

「大和艦長拝命す。死に場所を得て男子の本懐これに勝るものなし」と書かれた部分がすべてを表現しているようであった。これを見て、「親父は大和艦長になって、死を決意した」と思ったそうである。

有賀幸作大佐は戦艦大和が昭和十六年十一月竣工以来六代目の艦長として、十九年十一月着任した。艦長の全乗員に対する初訓辞は、

「私は大和艦長の辞令をうけてすぐ、二重橋前にぬかずき、皇居を拝し、いっさいを捨てて重大な職務にご奉仕する決意をお誓いしてきた」というもので、これを聞いた坂本一郎上等兵曹は、そのことばに胸をうたれた。心底からそう決意していると感じたそうである。

この時、艦長の顔には第四駆逐隊司令のとき生やしていたカイゼル髭は無く、きれいに剃り落とされていた。

十二月二十三日、軍令部次長であった伊藤整一中将が第二艦隊司令長官に親補され旗艦大和に着任した。

海軍軍令部第一課は燃料の途絶を見越し、「戦艦を第二艦隊より除き軍港防備とする」、「航空艦隊は近い将来の使用を考え、第二艦隊司令部に用法の研究準備をおこなわせる」などの方針から、昭和二十年二月十日、第二艦隊の編成をつぎのとおり改編した。

第二艦隊（司令長官 伊藤整一中将）

第一航空戦隊 旗艦大和・天城・葛城・隼鷹・龍鳳

(大和以外はいずれも航空母艦)

第二水雷戦隊 (司令官 古村啓蔵少将)

旗艦矢矧・第七駆逐隊・第十七駆逐隊・第三十一駆逐隊・第四十一駆逐隊  
この第二水雷戦隊司令官古村啓蔵少将は諏訪中学第十五回生、有賀大和艦長とは海兵同期で、同じ長野県上伊那郡朝日村（現辰野町）出身、いずれも諏訪中学校の寄宿寮「同志社」で切磋琢磨した幼馴染みである。

航空揮発油、ゴム、錫などを満載して、二月十日にシンガポールを出港した第四航空戦隊の航空戦艦伊勢、日向及び軽巡大淀、二水戦の駆逐艦霞、朝霜、初霜が、途中、終始米軍機の触接をうけ、米潜水艦約十隻に遭遇しながら、奇跡的に二月二十日、無事に呉軍港に帰投した。

司令官古村啓蔵少将ひきいる二水戦はここで第二艦隊に加わったのである。

二月二十六日未明、米陸上部隊に包囲されて、万策尽きたマニラ海軍防衛部隊司令官岩淵三次少将が自決して、マニラは米軍の手に落ちた。

B29 三百三十四機が、三月九日、十日にわたる真夜中、東京本所、深川、浅草方面を大空襲し、ために二十三万戸が焼失、市民約八万四千人が死亡し、百五十万人が路頭に迷う罹災者になった。

三月十七日、硫黄島の日本陸海軍部隊が全滅、米軍は硫黄島の飛行基地をいち早く整備して、新鋭戦闘機 P51 多数を進出させ、マリアナを発進した B29 の爆撃隊が、硫黄島を飛び立った P51 に護衛されて、日本本土の各都市を無差別に爆撃するようになった。

第一機動基地航空部隊 (司令長官宇垣纏中将の第五航空艦隊、司令部は鹿屋基地) の各攻撃隊は三月十八日から二十一日までに、四国南方に侵攻してきた米機動部隊を攻撃するため数次にわたって出撃したが、敵は十五隻の空母からなる三群の機動部隊で十八日早朝から、南九州、四国の空母基地に、延べ約千四百六十機、翌十九日には呉、阪神の艦船・工場と四国、北九州の空母基地に、延べ千百機をもって執拗な攻撃を仕掛けてきた。この結果は実に惨めな結果に終わり、第五航空艦隊の作戦前の作戦可能兵力約三百五十機であったものが、味方飛行機損失百六十一機 (うち六十九機は特攻)、地上被害五十機で四日間にその六割を失ってしまった。

米側資料によればこの時の米側の損害は空母五、駆逐艦一が損傷したが、沈没は一隻もなかった。

これにひきつづき米軍は、三月二十三日早朝、四国南方にあった三群の米機動部隊が洋上補給をして、沖縄へ直行し、その空母機隊をもって沖縄本島と南天東島を大空襲し、更に戦艦六隻、巡洋艦十二隻をもって沖縄本島南端にたいして猛烈な艦砲射撃をたたみかけてきた。この攻撃は翌二十四日、二十五日と終日同じようにつづいた。

米軍の沖縄攻略作戦が明白となったため、連合艦隊は三月二十六日、「天一号作戦発動」を下令した。南西諸島方面の米軍の攻略にたいする迎撃作戦である。

三月二十九日には米大輸送船団が慶良間泊地に入泊、いよいよ米軍の沖縄上陸が差し迫ってきたが、我が方は飛行機が少なく大規模な航空攻撃をかけ、これを撃破することはできなかった。沖縄方面の制空権は既に米側のものであった。

四月一日朝、沖縄本島の嘉手納沖から上陸を始めた米攻略部隊の上陸軍全兵力は約四十五万名、これにたいして日本の守備兵力は、第三十二軍司令官牛島満陸軍中將がひきいる二個師団半約八万六千名と、沖縄方面根拠地隊司令官大田実海軍少將がひきいる約一万名で、米軍のおよそ五分の一であった。

米上陸軍を支援する米英艦隊は米第五艦隊司令長官レイモンド・A・スプルーアンス大將総指揮の空母二十二、戦艦二十、巡洋艦三十二、駆逐艦八十三隻、艦載機約千百六十機の超大兵力であった。これにたいする日本艦隊は第二艦隊だけで、戦艦大和と二水戦の軽巡矢矧以下駆逐艦八隻の比較にならない兵力であり、動かせる空母がないために艦載機はなく、陸海軍の基地航空部隊の飛行機は大部分が特攻機とその護衛機で大和以下の艦隊を護衛する戦闘機は一機もないありさまであった。

四月五日午後三時、連合艦隊司令部は、海上特攻隊の第一遊撃部隊（戦艦大和以下二水戦九隻の第二艦隊）にたいして、

「海上特攻隊は四月七日黎明時に豊後水道を出撃、八日黎明時に沖縄西方海面に突入、敵水上艦艇ならびに輸送船団を攻撃撃滅すべし」

という電命を発した。……………やがて再び電命で、

「第一遊撃部隊は、明日六日拔錨、七日未明豊後水道出撃、指定航路を南下し、八日払暁、味方航空特攻作戦に策応して、沖縄嘉手納泊地に突入し、敵艦船を攻撃せよ」と送られてきた。

この命令は第二艦隊の出撃時期、航路、突入時期まで規制され、状況に即して自由に作戦行動をとることのできないものであり、航空特攻作戦を助けるために、唯、敵飛行機を引きつける囷になれということで、言い換えれば「生贄」にひとしいものであった。

「この連合艦隊命令は、作戦とは言いがたい、計画が非合理で、ほとんど成算が無く、二艦隊の将兵は犬死するしかないではないか」

出撃まじかの四月六日午後三時三十分頃、水上偵察機で飛んできた連合艦隊参謀1 草鹿龍之介少將と作戦参謀の三上作夫中佐にたいし、伊藤長官が問いつめると、二人は言葉に窮したが、三上が意を決して口を開き、

「最後には米軍の沖縄上陸地点に艦をノシ挙げ、全員陸上に 斬り込む計画です」

次いで草鹿が、

「要するに一億総特攻のさきがけとなっていきたい」とつづけた。

「それなら何をか言わんやだ。了解した」

伊藤は即座に答えた。

あらためて、一一艦隊の司令官、司令、艦長の各指揮官、参謀が集められ草鹿が作戦計画を説明し、

「一億総特攻のさきがけとなってもらいたい」と言った。

前日までの二艦隊の作戦会議では、

「ぜったいに戦果を期待し得ない自殺作戦には大反対である。無為に死んでたまるか」

などと猛反対であったが、既に、すべてを捨て、ただ職務に尽くす覚悟を決めたため、誰ひとり異議をはさまなかった。

以上のような戦局、状況のなかで数千の部下をひきつれて死地におもむかねばならなかった有賀の心境は察し得べきもないが、草鹿が後に有賀の十三年忌（昭和三十二年）の法要の席で語ったところによれば、

「有賀は私の真正面に座っていた。そして『わかっている、わかっている、俺に任せておけ』というように下腹を軽く手の平でたたきながら、ニコニコとうなずいていた。その落ち着き払った堂々たる姿を見て、

『ああこの人なら安心して任せられる』と私はこの上無い心強さを感じた」という。

かくして、大和以下の第一遊撃部隊は連合艦隊命令どおり沖縄に向け一路進撃した。一機の護衛戦闘機もないまま、四月七日午後零時三十五分頃から米空母機から猛攻撃を受けはじめ、大和以下はすべての対空火器をフルに使い、死力を尽くして奮戦したが、午後二時三十分までに、一波から四波まで合計三百八十六機の米飛行機隊の攻撃を受けて大和、矢矧と駆逐艦四隻が沈没した。そして、大和三千五十六名、二水戦九百八十一名、合計四千三十七名の将兵が失われた。艦長有賀幸作大佐は、最後の最後まで露天の防空指揮所で勇戦敢闘したが、刀尽き矢折れて、伊藤司令長官共々、大和と運命を共にした。

大和の横転爆沈する最期の有様を護衛駆逐艦冬月から悲痛な思いで目撃し、油にまみれて泳いでいた森下参謀長他多数の将兵を直接救助した救助艇の艇指揮は、諏中四十回生兵科四期予備学生対潜水測士、土橋久男海軍少尉であった。

昭和二十年四月八日夜、大本営発表の臨時ニュースがラジオから流れた。昨夜不吉な夢をみて、父の戦死を直感し、その死に方が気になっていた長男正幸海軍技術見習尉官も四日市の海軍燃料廠で聞いていた。



「昭和一一十年四月八日十七時大本営発表  
わが航空部隊ならびに水上部隊は四月五日以来反復、沖縄本島周辺の敵艦船ならびに機動部隊を攻撃せり  
……我が方の損害、沈没戦艦一隻、巡洋艦一隻、駆逐艦三隻。  
右攻撃に参加せる航空部隊ならびに水上部隊はいずれも特別攻撃隊にして……  
……  
我が方としても、軽視することのできない損害であった……」

昭和二十年六月二十三日、沖縄が米軍の手に落ちた。  
日本側の戦死者は、沖縄県民が十数万人、将兵が約六万五千人という悲惨なものであった。  
米海軍の損害は、艦船沈没三十六隻、損傷三百六十八隻、戦死四千九百七人、負傷四千八百二十四人、陸軍は戦死七千三百七十四人、負傷約三万一千人、飛行機喪失七百六十三機であった。  
日本海軍にはもはや主として若者を犠牲にする特攻しか戦う術を失っていた。しかしながら、航空特攻も、海上・水中特攻も、大兵力で科学的な米軍に決定的打撃を与える確かな成算など見込めるはずもなかった。  
八月六日、広島に原爆が投下され、九日、ソ連が対日戦を開始、長崎に原爆投下、このままだと、日本の壊滅は必至であった。  
昭和天皇は八月十四日の御前会議で、ポツダム宣言受諾（無条件降伏）を裁断し、戦争終結を決定した。  
八月十五日正午、天皇の終戦詔書朗読の録音放送により戦争が終わった。生き残った一億の国民は救われた。  
絶望の悪条件下で「神風大和」たらんと最後の最後まで奮戦敢闘し、悲壮極まる最期を遂げた戦艦大和部隊のこの壮挙も、天皇の終戦裁断を促す一つの基礎となったことは疑いのないところである。

終戦後の昭和二十年九月二十日頃、上諏訪から平出の有賀家に移っていた妻好子宛てに海軍省からの書留・速達・親展の封書が届いた。

「海軍大佐有賀幸作殿名誉の戦死」と言う八月二日付の内報であった。

戦死公報は翌二十一年二月二十六日付けで、第二復員省（海軍省は前年廃止）人事局長名で通達された。

「……軍艦大和艦長トシテ南西諸島方面ノ戦闘ニ於テ御奮戦申遂ニ壮烈ナル戦死ヲ遂ゲラレタル次第第二有之……」

「……右ノ趣上聞ニ達スルヤ畏クモ生前ノ殊勲ヲ嘉セラレ特ニ二階級ヲ被進海軍中将ニ被任御沙汰ヲ拝シ候……」

海軍中将昇進は戦死した日の一一十年四月七日、同日付功二級金鷄勲章旭日重光章が授与された。

昭和三十二年（一九五七）四月、辰野町平出の菩提寺見宗寺に故海軍中将有賀幸作の墓碑が建立された。京都の浄土宗総本山知恩院門跡大僧正から追贈された戒名は

「至誠院殿顕誉義烈純忠大居士」であった。

有賀幸作は諏訪中学の第十六回生で、同級生には「琵琶湖周航の歌」の作詩者小口太郎等がいる。また一年上には前述の第二水雷戦隊司令官となって沖繩特攻に同行した古村啓蔵、二年先輩には同じ海軍に進んだ中沢佑（兵 43 期）、宮下頼永（兵 44 期）等がいた。

現在もそうであるが、諏訪中学校は元来、「自治、質実剛健、勤勉努力」を校風とし、「雖千万人吾往矣」（千万人といえども吾往かん）の気概を尊重する気風をもっていた。創立以来、諏訪一円および郡外周辺から上諏訪町内に止宿して学校に通う生徒も多かった。なかでも小平権一（五回生）、中村正雄（六回生・海軍少将）等が創った同志社は、特に生徒の自主的運営による寄宿舎で、交通不便な山浦地方や郡外の生徒が自治共同の精神で生活し、交代で炊事当番をし、文字通り蛍雪を重ね、互いに切磋琢磨した道場でもあった。

有賀もこうした雰囲気の中で勉強し、海軍兵学校を目指したものと思われる。ところが、父に無断で海軍兵学校を受験して見事合格し、天にも昇る思いであった有賀の海兵入学を、父は家業の「平野屋金物店」を継がせる理由でガンとして認めなかった。幼い弟が家を継ぐと言う申し出と周囲のとりなしで、ようやく許しを得て入学希望書を送ることができた。

一年早く海軍兵学校に進んだ吉村は暴飲暴食がたたって身体をこわし、遅れて有賀と同期に編入され、卒業した。

同郷の少尉候補生二人はともに練習艦艦手に乗り組み、近海に続く遠洋航海にでた。この時の練習艦隊司令官は鈴木貫太郎中将（兵 14 期、のち大将）であり、二人はこの司令官から強く感化を受けたという。

有賀は大尉に進級すると、念願の水雷学校高等科学生となった。就業一カ年で、水雷長の素養に必要な学術技能を習得するものである。水雷学校を終えた有賀大尉は新鋭駆逐艦秋風水雷長となった。以後第三十一号駆逐艦、軽巡洋艦那珂、木曾の水雷長を経て、昭和四年十一月、晴れて一国一城の主となって、二等駆逐艦夕顔の艦長となり、その 1 ヶ月後海軍少佐に進級した。翌五年十二月、同型の芙蓉艦長に転じ、昭和七年には一等駆逐艦太刀風兼秋風の艦長、八年松風、九年電の各艦長を歴任、艦長としての素養を積んでいった。

昭和十年、有賀少佐は、鎮海要港部参謀に転任した。鎮海は朝鮮半島南端にあって、対馬海峡に面する要衝であり、この前年から諏中先輩の金子豊吉大佐

(8回生。兵38期)がここの防備隊司令に任じていた。

十一月中佐に昇進した有賀は先任参謀となった。

昭和十二年七月七日、北京郊外の蘆溝橋付近で、日中両軍が衝突し、北支(北中国)事変(のちに支那事変、日中戦争と改称)が発生し、戦火は次第に広がっていった。同年十二月軽巡洋艦川内副長に転出し、第一艦隊所属の第一水雷戦隊旗艦として揚子江方面に出動していた同艦に着任した。その一年後には連合艦隊所属の第一掃海隊司令に任命され、揚子江河口から武漢方面にわたって掃海、上陸援助、中国軍掃蕩作戦を指揮した。昭和十四年第二艦隊第二水雷戦隊の第十一駆逐隊司令となった。司令駆逐艦初雪と白雪、吹雪とで編成された駆逐隊であった。

昭和十五年(一九四〇)、日本陸軍と第二次近衛内閣の松岡洋右外相が推進していた日独伊三国同盟に調印するなどして、米英と敵対することになった。

この年十一月、有賀中佐は大佐に昇進し、第十一駆逐隊は連合艦隊司令長官山本五十六大将の直卒する第一艦隊の第三水雷戦隊に組み入れられた。

昭和十六年、日ソ中立条約がモスクワで結ばれた。

一方ワシントンでは連日、日米交渉がつづけられていたが、ほとんど進展せず、

「日本軍は仏印、中国から全面的に撤退せよ。

日本は日独伊三国同盟から脱退せよ」

と要求され、両国の折り合いがつかなかった。

ドイツは独ソ不可侵条約があるにもかかわらず、一方的に破って、ソ連侵攻を開始した。

米国は日本の南部仏印進駐を侵略行為として、対日全面石油禁輸を実施した。

日本は手持ちの石油で米国と戦い、その間に蘭印などの資源地帯を攻略占領して石油を確保するか、米国の要求(仏印、中国からの全面撤兵、日独伊三国同盟脱退など)を大幅に呑むか、二者択一の窮地におちいり、遂に対米戦を決意することになるのである。

こうした時期に有賀は、第一線で行動する最新鋭駆逐艦四隻(司令駆逐艦嵐と萩風、野分、舞風)で編成される第四駆逐隊司令に任命された。

太平洋戦争緒戦から、日本陸海軍部隊がガダルカナル島(ソロモン諸島南東部)の争奪戦に敗れて撤退した昭和十八年二月まで、第四駆逐隊を指揮、南支那海、インド洋、太平洋の各海域で、獅子奮迅の勇戦敢闘を展開した。

昭和十八年三月、有賀は第八艦隊旗艦鳥海艦長に転じ、カロリン諸島のトラック、ニューギニア東方ニューブリテン島のラバウル、ソロモン諸島北西部ブーゲンビル島のブインなどを基地として、ソロモン諸島方面の作戦に出撃、指揮官としての面目躍如たる活躍をして、部内にその名を高め、「アレガコウサク」



などと称賛された。

有賀が鳥海艦長に転じた六ヵ月後、第四駆逐隊の野分艦長として、諏中六年後輩の守屋節司中佐が着任し、また三ヵ月後には鳥海の航海長として、同じく六年後輩の里見五郎中佐が、海軍兵学校の教官から転任してきた。惜しいかなこの二人は、いずれも翌十九年十月、レイテ作戦のフィリピン沖海戦で奮戦し、名誉の戦死を遂げられている。

（兵七十四期生出寿氏の「戦艦大和艦長有賀幸作」より）

有賀中将の歌

一、信州伊那の健男児 伝統高き江田島に  
有為の才を養いて 桜と競う国の華

二、戦艦大和艦長の 重任拝する身の誉れ  
君ぞまことの快男子 武人の範と仰がれぬ

三、太平洋に海暗く 沖縄の運きわまりて  
往けよと降る大命に ただ片道の決死行

四、四月七日の雲低く 雲霞と寄する敵の機と  
決戦数刻力つき 不沈戦艦ただ炎

五、総員退去を今しつつ 身をコンパスに縛したり  
部下がなさけのビスケット ふくみて艦と轟沈す

六、勇士三千後や先 あわれ散りにし若桜  
今年も香る靖国に 壮烈世々を照らすらむ

## 余録篇

諏訪海軍史刊行会編「海こそなけれ ―諏訪海軍の航跡―」（非売品）  
平成6年11月3日発行 同会事務局発行（大田吉郎代表）の  
423－429ページ

## 有賀幸作中将の思い出

## 有賀大佐を偲んで

元駆逐艦嵐水雷長 田中一郎（兵 64 期）

この度「諏訪海軍」の先輩諸賢の足跡と功績を記録に残し、もって追悼顕彰したいと念願されて、そのガイドを米沢海軍の「遠い潮騒」に求められたことは誠に光栄に感ずると共に出来る限りの協力をすることにした。

昭和十六年太平洋戦争突入の年に完工就役した最新鋭駆逐艦嵐・萩風・野分・舞風の四隻を以て第四駆逐隊が新編され有賀幸作大佐が第四駆逐隊司令を拝命された。

有賀大佐は長野県諏訪中学の出身で豪放屁落、根っからの水雷屋で名うての船乗りであった。

私は司令駆逐艦嵐水雷長として司令・艦長指導の元に月月火水木金金の猛訓練を行なった。

戦争突入後は第四駆逐隊は南方部隊本隊に配属され、南方軍と協力して、まず比島・英領マレー及びボルネオ方面の敵兵力を撃破し、比島南部マレー方面から蘭印（蘭領インド支那、現インドネシア）に進攻して占領する作戦の支援に当たり、南洋の海を疾駆し、赫々たる戦果を収め、連合艦隊の第一段作戦は成功裡に終了した。

昭和十七年四月第四駆逐隊が横須賀に帰還した折、私は兵学校教官を拝命し、退艦した。

その後有賀大佐は第四駆逐隊を率いて、ミッドウェー海戦に続いてガダルカナル島進攻作戦並びに同島撤収作戦などに死力をつくされ、常に危機の中にあっても泰然自若、ものに動じない、勘の鋭い、野性匹的な、実戦に強い指揮官であり、武人であった。

## 父との思い出

長男 有賀正幸（諏中 43 回生）

呉、横須賀、大湊、鎮海、朝日（長野県）と、私は小学校を六回転校した。小学校五年のときは、今の韓国の鎮海にいた。中学でも度々転校するようでは大変だ、と考えた父は、祖母がいる朝日村の生家から父の母校である諏訪中学へ、私を進学させることにした。

父は駆逐艦乗りで、年間の三分の二は海上生活だった。だから、私たちは常に母子家庭の寂しさを味わっていた。それで父がたまに帰宅すると、家の中はぱっと明るくなり大賑わいになった。が、一週間もすると父の雷が落ちはじめ。これはたまらない、と思っていると、間もなく出港してホッとした。

帰港中は、余暇のあるかぎり家庭サービスに徹していた。いや奉仕というより、父にとって最も楽しいひとときであったろう。海や川へ魚取に、山野の昆虫採集などへよく連れて行ってくれた。こんなときの父は、子供以上に夢中になっていた。無邪気な父だな、と思った記憶が懐かしい。

また、水交社をはじめ高級レストランに、帰港中、一、二度は家族（お手伝いさんも）揃って食事に出掛けた。家族ハイキングや泊まり掛けの旅行もした。陸上の感触や家族との語らいがたまらなく嬉しそうだった。

父の駆逐艦にも幾度か遊びに行った。昭和一桁時代の古い駆逐艦は、居住性が極めて悪く、艦長室も驚くほど狭苦しかった。出てくる栗饅頭やお茶などすべてのものが油臭くてまずい。親父はよくこんな暮らしに耐えられるな、と感心したものである。父はだらしのない私の精神をたたき直すつもりだったろう。艦内生活の厳しさをいろいろと話してくれた。その父が「ああ、畳の感触はなんとも言えないな」と、暇さえあれば畳の上にごろごろと寝転がっていた。

それで私は、厳しい艦内生活を強いられる海軍士官になる気持ちをなくしてしまい、家族といつも一緒に暮らせる気楽なサラリーマン生活を夢見るようになったのである。

祖父は日清、日露戦争で、それぞれ功七級、功六級の金鷄勲章を賜った召集軍人である。四大節の式典に、勲章をつけた特務曹長の軍服姿で参列した祖父は、当時の少年たちの憧れの的であった。

父は同志社から諏中に通学していた。先輩とくに一年うえで同じ朝日小学校出身の古村啓蔵氏の海兵入学が大きく影響したのであろう。古村氏の後を追うように、一年後に海兵の試験を受け合格した。が、喜び勇んで報告に帰った父は、予想に反し祖父の猛反対を受けた。再三懇願したが、どうしても許しが出ない。父も折れない。結局、親族会議が開かれた。

この席でも祖父は頑として聞き入れない。困り果てているとき、わずか六歳の弟が、

「そんなに兄さんが海兵に行きたいのなら、俺が代わって平野屋を継ぐから海兵にやってくれ」と発言した。それで空気は一変、

「こんな子供でさえ言うのだから、幸作はいなかったものとして海兵にやろう」という意見が強まり、祖父もついに承諾した。

そのとき父は廃嫡し、祖父の軍刀だけをもらって家を出ることになった。

喜んだ父は、すぐ受諾書を海兵に送付した。が、その書類が海兵に着いたときは、すでに締切日を過ぎていた。しかし、郵便局の消印で救われたらしい。父の名前は、合格者欄外に万年筆で書き加えられている。

祖父は赤ん坊の私を膝に抱き、「お前は絶対に軍人になるなよ」と言いながらあやしていたそう。日清、日露戦争で悲惨な光景を見ているだけに、愛する

長男にその苦しみを味合わせたくなかったのだろう。だが、ときは富国強兵の時代である。さぞかし筆舌につくしがたい苦悩に苛まれたことであろう。

その祖父は「幸作は国に捧げた子だ。俺が死んでも絶対に知らせるな！」と病院中に響き渡るような大声で絶叫し、こと切れたという。明治男の凄まじい気概が偲ばれる。

だからだろう、父は一度も私に海兵へ進め、とは言わなかった。だが、今になると安易な道を選んだ軟弱な自分に一抹の後ろめたさを感じる。

父が諏中を去って二十三年後に私は入った。学校には、父の恩師であった牛山伝造、三輪玄蔵の両先生や、撃剣部の先輩で親しかった河西健二先生がおられた。

私が諏中を卒業する直前に太平洋戦争がはじまり、先生方に浪人は許されんぞ、と脅かされた。早くから親許を離れ里心がついていた私は、当時家族が住んでいた鎌倉から通える横浜高工の応用化学科に進学した。

ドーリットルの東京空襲の前日、南方作戦から帰還した父は、ミッドウェー海戦の準備中に部下の結婚式で平賀東大総長（海軍造船中将、造艦の権威）と同席する機会があった。そのおり、平賀さんから私を海軍の技術委託学生にするように勧められた。それで帰宅するや、珍しく厳しい口調で、

「この戦争は燃料で決まる。お前は応用化学だから燃料を専攻しろ」、

と委託生受験を命じた。いずれにしても軍人になる時代だ。私はそれから夢中で勉強し、翌年、燃料専攻の委託生に合格した。父は大変喜んでくれたが、独言のように

「お前がお役に立つようでは、この戦争は負けだな」と呟いた。その言葉は、いまでも鮮明に私の脳裏に焼き付いている。

海軍に入隊する前夜、たまたま自宅にいた父と一献傾けることができた。これが最初で最後の親子の酒盛りとなった。そのおり、指揮官の心得として父は、

「軍人の偉さは位ではない。国を思う真心だ。俺は第一線に出るとき、いつも艦橋で自分の配下の誰よりも国を思う心で優っているか、を反省している。お前もこの心構えだけはわすれるな」と諭してくれた。これが結果的に父の私への遺言となった。

### 有賀幸作中将記念碑

昭和四十年秋、有賀大和艦長の記念碑を郷里平出に作りたいと、建設委員会が発足し、小学校同級生、上伊那郷友会、清陵高校同窓会、海軍兵学校第四十五期会、諏訪郷友会、水交会、道志社、信武会、東京朝日会等多くの団体の参加をえて、全国二千有余の人々の募金によって建設された。

昭和四十二年五月六日完成、中央線辰野駅より徒歩約十数分、平出の氏神法

生神社の僻蒼たる森を背景にして伊那谷に面し、遠く中央アルプスの姿も美しい景勝の地に立つ。

◇碑の表面鑄銅板碑文

国に捧げた  
君たちの尊い  
いのちよ  
とこしえに世  
界平和の  
いしずえたれ  
と祈る  
有賀喜左衛門 撰  
中川紀元 書

◇碑の裏側台石の鑄銅板碑文

有賀喜左衛門 撰  
古村啓蔵 書

太平洋戦争の悲劇を再び繰り返すことのないために私たちはこの碑を建てた。  
昭和二十年四月、日本海軍は戦艦大和を旗艦とし残存僅か十隻を以て海上特別攻撃隊を編成し沖縄に突入しようとしたが進撃の途上敵機の強烈な攻撃に遭い種子島西方海上において遂に敗退した。

その時巨艦大和に艦長として座乗していたのは平出出身の有賀幸作君であった。

君は艦の沈没に先立ち総員退去を命じ艦橋のコンパスに身を縛り艦と運命を共にした。

私たちは君と共に祖国のために壮烈な戦死を遂げた多くの将兵の心情を偲び日本海軍の最後の日を眼に浮かべる。

昭和四十二年五月六日

有賀幸作君記念碑建設委員会

◇有賀幸作君記念碑建設の趣意

戦争はもうしたくないということは、今日私たち日本人の胸に深くたたまれた願望であります。

私たちは敗戦の日のことを思うごとに、戦いに死んだ人々に対し、いとおしい思いに胸がかきむしられる感がいたします。今日生きていたならば、この人々



はどのように有能であり、日本の新しい建設のために必ずや立派に働いてくれたにちがいないと思わずにはいられないのであります。

勝つことは華々しく、敗れることは悲惨であります。だが、敗れ去る日において人間の生命はかえってその美しさと真実とを最大限に発揮するのであります。敗戦をただ悪夢として受け取るのではなく、その中にこれからの生き方の教訓があるとしたならば私たちはそれを掘り出さなければならないと思うのであります。

過ぐる太平洋戦争は、昭和二十年に入ると、アメリカの日本本土攻撃が日毎に激烈をきわめ、四月には本土の主要都市は被爆炎上し、その戦火は沖縄本島に及んでまいりました。数次の敗退によって陸軍は到る所に分断され、海軍も艦船は残り少なくなり、神風特攻隊、回天特攻隊の突撃を以てしても、戦勢を挽回することができなくなりました。連合艦隊は残存海上部隊の全力である世紀の巨大戦艦大和のほか、わずかに巡洋艦矢矧及び駆逐艦冬月、凜月、磯風、浜風、雪風、朝霜、霞、初霜の十隻を以て海上特別攻撃隊を編成し、片道燃料をつんで、四月八日早朝を期して沖縄へ突入することを命ぜられたのであります。

戦艦大和はこの海上特攻隊の旗艦として進撃の途上、四月七日、有力な敵空母艦隊に遭遇し、その連続攻撃を受け勇戦奮闘いたしましたが、味方空軍の援助なき裸艦隊の悲しさ優勢な敵の空中攻撃により、沖縄突入を果たし得ず、種子島西方において僚艦と共についには爆沈するのやむなきに至りました。

大和艦長有賀幸作大佐は、艦の沈没寸前に総員退去を命じ、艦橋のコンパスに身を縛り従容として艦と運命を共にいたしました。その最後のいさぎよさといい、責任感といい、まことに武人の鑑でありました。しかし私たちの眼には彼と共に日本の最後の運命をかけて勇戦したすべての将兵の最後の姿が感銘深く浮かんで来るのであります。昔は「一将功成り万骨枯る」という言葉もありましたが、この沖縄海戦の最後の様子は、日本の人柱となったすべての英霊の勇姿が、有賀艦長の壮烈な死に象徴されているといってもよいのであります。

私たちはかつての軍国主義を礼賛しようとするものではありません。しかしこの人々が日本民族の運命に、その全生命を捧げたことがいかに美しく、意味深いものであったかを看取しなければならないと思うのであります。

今日はすでに時勢も異なり、日本は今や世界平和と人類福祉の向上のために有力な一翼となることを新しい目標とするようになりました。そしてこの新しい目標に向かって、私たちは戦場に散った人々と同様に、私たちの生命を捧げる覚悟がなければならないと思うのであります。

私たち郷党知人相寄り、有賀君の壮烈な死を偲び、純真無比な故人の人柄を慕い、前述の趣旨のもとに郷里平出の地に記念碑を建設して永く後世に遺した

いと思います。

右記念碑は三緑川産の巨大な自然石を佐久石を積んだ台座に据え、表面に銅浮彫海戦図（戦艦大和最後の日）及び有賀中将の肖像を配して、近くの生家の方向に向け、周囲には池石噴水を設けて、その美を引き立てている。

### 機動部隊旗艦「赤城」の最後に奮戦する諏中の二先輩

#### ー有賀幸作大佐と、土橋豪実中佐ー

元赤城機関長 反 保 慶 文（故人・機 28 期）

艦長一人が責任をとって艦と運命を共にするとの言葉にしばらくはものも言えず、艦長の胸中を察しはしたもののどう考えてみても艦長の責任ではないと確信したので、私は艦長に

「この度の敗戦は艦長に責任があるとは思いません。どこまでも私達は艦長と行動をともにします」と述べ、更に副長に「副長そうでしょう」と同意を求めると言下に「勿論」とたった一言。艦長は頷きながら低い声だが凜然と

「命令だ。君達はまだ若いのだ」と言われたが私達はどうしてもこの命令に従う気持ちになれない。副長鈴木忠良中佐、増田中佐等交々熱涙を浮かべて一応ともに退去して下さいと進言した。艦長は容易に聞き容れられなかったが遂に我々の無理な熱意にほだされたか「それではクラスメートのおる陸奥まで君達の言葉に従おう」。

ここに於て、まず第一に御真影（天皇の御写真）と赤城神社（軍艦には必ず艦名に因んだ由緒ある神社の御分霊が守護神として奉斎されている）とを屈強な主計中尉及び下士官に奉持させて駆逐艦に移し、次いで傷者を移乗させた。

駆逐艦へ移る途中の短艇のなかで息を引き取ることのわかり切った傷者もを持ち上げて自分の順番を待っている。勿論見捨てるわけにはいかない。数の少ない短艇で運ぶのであるからなかなかさばけない。元気なものは海中に飛び込んで泳いで行く。短艇が赤城を離れるとき誰いうとなく万歳の悲痛な叫びが葬送曲のように聞こえてくる。

どうせ早かれ遅かれ赤城は処分しなければ敵にろ獲されると考えたので、私は増田中佐、内務長土橋豪実中佐（容貌魁偉、斗酒尚辞せぬ豪胆気骨稜々その名の示す通りの豪傑で、被弾直後自分の指揮所周辺を火炎が包囲し舷窓より他に逃げ口がなかったが肩幅の広い彼は軍服のままで舷窓が小さすぎて出られない。やむを得ず軍服もシャツも脱ぎ捨て越中揮一つの裸体でどうにか抜け出し、どこで拾ったのか二等水兵の事業服を着て、決死の形相物凄く火炎をくぐり黒煙を抜けここを先途と防火隊を指揮していた。十九年あ号作戦中部太平洋

戦に空母大鳳内務長として勇戦中敵潜の雷撃により戦死、信州諏訪中出身）等と共に、それまでは海水の浸入しないように緊締してあった隔壁扉、舷窓を明け放って水が浸入し易くなるべく早く沈むように処置をした。

錯綜した数々の未練を残して駆逐艦の短艇にうつったのは午後八時三十分頃であった。駆逐艦嵐の上甲板は退去者で超満員で、青木艦長は駆逐隊司令有賀幸作大佐（信州諏訪中出身。豪放無類、沖縄作戦で大和艦長として壮烈な戦死を遂げらる）の私室に、私は八名の士官と一緒に駆逐艦長の狭い私室に割り込んだ。勿論横臥する余地もないからソファに燕のように並んで腰をかけた。応急給食の赤坊頭大の握り飯のうまかったこと、駆逐艦長渡辺保正中佐の厚意によるとっておきのジョニーウオーカーを飲んでやっと人心地がつくと朝来の悪戦苦闘がまざまざと走馬灯のように頭に浮かんでくる。

総員移乗を終わった後、青木艦長は駆逐艦の無線を以て長良へ移乗されている南雲中将に対し赤城を処分してよろしきやの意見具申を打電した。この電報を傍受した山本連合艦隊司令長官からは南雲中将の指令に先だって「処分待て」と電命してきたしかしその後の推移は残存部隊をもっては到底夜戦遂行の見込みはなく、明らかにわが方の敗戦と決したので、正午近く赤城を処分せよの命令が発せられた。

ここに於て有賀大佐は野分、嵐、萩風、舞風の四隻の駆逐艦に命じ各々一本づつの魚雷を発射させることになった。赤城処分と聞くや傷者も起き上がり頭をうなだれて駆逐艦長の発する

「目標赤城’・’・ウウー（と泣き声）発射用意、発射！！」の悲壮な号令に身を悶えた。

発射された魚雷は白く雷跡を残して赤城の左舷に突進、命中、約二十分で艦尾から沈下をはじめ、最後に艦首にある金色の菊の御紋章は折からの皓々たる月光にキラキラと光って、見送る将兵のさんさんとして流れる沸とこみあげてくる嗚咽の中に沈没した。時に六月六日午前一時五十五分。

野分駆逐艦長古閑孫太郎中佐は、同艦が装備したわが海軍の最新式である九三式魚雷の最初の目標が、わが空母赤城であったことは、武人として、日本人として、誠に忍び難いことであったと、沈痛な面持ちで述懐していた。真珠湾攻撃以来六か月間赤城の御紋章と生死を共にするの決意を以て奉公して来たが、今母艦と永久に別れなければならなかったことは返す返すも無念やる方なく死ぬまで母艦の一機関長として赤城の仇を討ってやるぞと拳で涙を拭った。

何しろ小さい駆逐艦に所定の乗員以外に傷者を含む千名以上が収容されたためその混雑は大変なもので、勿論居住甲板には入れ切れず、傷者も海水の飛沫を浴びる上甲板にゴロ寝の惨状である。重症患者は次々と息をひきとって行く。

平時大洋で死亡した場合は立派な寝棺に納め教練用砲弾を入れて錘とし、軍

艦旗で包んで総員見送りのうちに丁重に水葬するのであるが、この場合棺の準備は勿論その材料もない。英霊に対して誠に礼を失し申し訳のないことではあるが、半紙に赤インキで軍艦旗を描いたものを胸に巻き付けて水葬するのやむなき状況であった。肉親の方には到底発表の出来ない事実である。

それにつけても私は艦長の身辺が気遣われるから、再三軍刀を預かりたい旨申し出たが頑として許されないので、終夜司令室の入口のリノリウムの上にあぐらをかいて艦長の動静を見守った。両掌をかなりひどく火傷せられているため疼痛と苦悩とでソファアの上で報転反側まんじりともせられなかった。

短い夜は明け敵の攻撃圏内から遠ざかり迎えに来てくれた主力部隊の姿も見えるようになったので、有賀大佐は手旗信号で司令部宛に

「重症患者を含む二千名近い将兵が波しぶきに濡れている、人道問題なり、見るに忍びぬ、一時も早く収容されんことを望む」旨の意見を具申された。そのためばかりではないが、各駆逐艦に収容されていた将兵は夫々指定の大艦に移乗、私は戦闘日誌をごしょう大事に携帯電灯を肩からぶらさげ敗残兵よろしくの風態で陸奥に、ここで真っ先に出迎えてくれた同期生(兵 47 期、同艦副長)植村庭三中佐と握手した時には不覚にも涙がとめどもなく流れ落ちた。汗と油と海水とでグチャグチャになった服を脱ぎ棄て風呂を浴びてサッパリとした時には

「ああ戦終わりにて命ありぬ」の感を新たにし、つくづくと自分のからだを見回した。

斯くしてミッドウェー攻略は完全な惨敗に終わり、部隊は廻れ右をして軍艦旗もうなだれ悄然として柱島錨地に帰った。

(水交 No.471 平成六年一月号より、抜粋)